

氏名

幡 慶一

学位の種類 医学博士

学位授与番号 乙 第306号

学位授与の日付 昭和43年9月30日

学位授与の要件 博士の学位論文提出者
(学位規則第5条第2項該当)

学位論文題目 ウィルス性肝炎時にみられる肝網工構造の微細変化に関する電子顕微鏡的研究

論文審査委員 教授 小坂淳夫 教授 平木潔 教授 大藤真

学位論文内容の要旨

急性ウィルス性肝炎時にみられる肝臓の組織学的变化の特長の一つは Spotty necrosis である。このさいみられる肝網工構造の微細变化を明らかにすべく、発病後比較的早期に肝生検を行なった三症例につき電子顕微鏡的に検討し、以下の結論を得た。

- 1) 急性肝炎においても Spotty necrosis の部位に一致して既に肝網工構造の変化を観察することができる。
- 2) 肝網工構造の変化をもたらす起点には肝細胞壊死があり、それに膨化傾向を示すものと凝縮傾向を示すものがある。
- 3) 著明な線維増生をともない、肝網構造に変化をもたらすものは凝縮傾向を示す壊死細胞に多い。
- 4) 肝網工構造の変化が著しい部では、Disse 氏腔の電子密度を増し、そこに原線維が密に集束し、線維束の太さを増している。又細胞の萎縮による格子線維の集合も加わり、線維束相互の間隔も狭くなっている。
- 5) 膨化傾向を示す壊死肝細胞部では、線維増生はともなっていないことが多い、格子線維は原線維として集束することなく疎に認められるにすぎない。
- 6) 線維増生に関与する母細胞に注目して、類静脈洞、間葉系細胞を検討したが、線維と密接な関係を形態学的にとらえられなかった。

論文審査の結果の要旨

本研究はウイルス性肝炎にみられる肝網工構造の微細変化に注目して検討した成績で、肝細胞壞死が膨化傾向を示すものと凝縮傾向を示すものがあること、肝網工構造に変化を来たすものは肝壞死の凝縮傾向を示すものを起点とすることなど新しい知見に富み価値ある成績を得たものである。

よって本研究者は、医学博士の学位を得る資格があると認める。